



Title	「水」が持つ価値とは何か：第8回有識者インタビュー：小倉紀雄氏
Author(s)	村上，道夫；中村，晋一郎
Citation	水道公論. 2025, 61(7), p. 46-53
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/102303
rights	日本水道新聞社提供
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「水」が持つ価値とは何か

―第8回有識者インタビュー― 小倉紀雄氏―

インタビュー：原稿執筆：村上道夫（大阪大学感染症総合教育研究拠点教授）

インタビュー：中村晋一郎（名古屋大学大学院工学研究科准教授）

インタビュー：小倉紀雄（東京農工大学名誉教授）

小倉紀雄氏の経歴

人々が持つ目的や価値と切り離して知を探索する科学を認識科学と呼ぶに對し、目的や価値の実現を目指す科学を設計科学と呼ぶ。

2003年に日本学術会議運営審議会附置新しい学術体系委員会が示した学術の体系の仕方の一つであるが、水にまつわる学術は、認識科学と設計科学の両側面を持つ。私たちが守りたいと思ったり、誇らしく思ったりするような「水に関する価値」について、様々な分野の有識者に尋ねるというインタビュー企画も、本誌の2024年5月号の初回から数えて8回目となった。

水に関する価値を社会で実現するには、市民参画のアプローチが必要不可欠である。今回は、市民環境科学を開いた小倉紀雄氏にインタビューを行った。

小倉氏は1940年に東京都に生まれた。1967年に東京都立大学大学院理学研究科博士課程を修了後、同年に同学理学部助手に着任した。その後、1972年に東京農工大学農学部に助教授として異動し、1985年に同学教授に就任した。2003年に同大学名誉教授、2007年に日野市環境情報センター長を歴任した他、環境省越境大気汚染・酸性雨対策検討会委員、国土交通省河川生態委員会委員などを務めた。市民向

けの水環境の書籍として、「調べる・身近な水」（1987年、講談社ブルーバックス）、「きれいな水を取り戻すために…市民環境科学の誕生」（1992年、あすなろ書房）、1999年6月「調べる・身近な環境」（1999年、講談社ブルーバックス、共著）、市民環境科学への招待」（2003年、裳華房）がある。

本稿のインタビューは、小倉氏が水に関する分野に入った当初と市民環境科学に関する取組みをしていた時期における水への価値観について尋ねたものである。

水分野に入ったきっかけと分析化学者としての水の探求と価値観

村上 水分野に入ったきっかけを教えてください。

小倉 東京都立大学理学部の化学科で、分析化学と地球化学を専門とする半谷高久先生のもとで卒業研究をしました。野外で試料を集めて分析ができて、さらに、水に関する研究ができるということに興味を持って、その研究室に入りました。

村上 水について関心を持ったのは何か理由があったんでしょうか。

小倉 大学に入ったのは196

2年だったのですが、やはり、当時はまだ下水道が十分には普及していなくて、多摩川などの周りの水はずいぶん汚れていて、何とかしたいなと思っていたんですよ。そこで、水の汚れの分析というところから入ったのです。

村上 その当時は、いわゆる環境学というのはなかったころですね。

小倉 ありませんでした。化学科の中に分析化学と地球化学という研究室があるのはちょっと異色だったんですよ。

村上 卒業研究、修士と博士課程ではどのようなことをされたんですか。

小倉 水の汚れを簡単に検出できる方法として、紫外線の吸収法、いわゆるUV法を検討して、汚濁の指標として有効であるということとを明らかにしました。博士課程では、河川、湖沼、海で異なる紫外線の吸収を示すことに気づいたんです。特に海水は、淡水には無いような、短波長で非常に強い吸収を示しました。海の強い短波長の吸収は臭化物イオンだったんですが、その成果は初めての論文と

して、1966年にNature誌に掲載されました。いわゆる人工海

水の中に主な成分の中には臭素は入っていないんですが、もっと詳細な人工海水を一つひとつの成分をしらみつぶしに分析するのと、臭素にたどり着いたのです。これが面白かったのですね。

村上 もともとは、有機物の指標として用いるために検討していたけれども、それとは別に短波長の吸収で臭化物イオンが見つかった、ということですね。

小倉 そうですね。指標として220ナノメートルや250ナノメートルぐらいの吸収ではCODやTOCと相関があり、簡単に測れるので指標として有効ではないかということでした。その一環として臭素イオンが短波長での吸収に寄与しているということが分かって、世界では他には誰も言っていなかったことでしたから、面白かったのです。

村上 そのときに重視していたことは何でしょうか。分析化学として重視していたこと、あるいは、水環境を良くするという思いに関連することとして、いかがで

しょうか。

小倉 当時は学生ですので、あまり世間に成果を還元するとか、そうしたことを考えていませんでした。学問の真理を追究するといふような立場から研究をしていて、その結果、UV法は有機物の汚染の指標になると同時に、臭化物イオンのようにユニークな短波長での急激な吸収があるということが分かって、それで一段落だったんですね。その後、助手になって、今度は海の有機物が面白くなってきたのです。東大の海洋研の船に乗ったりして外洋に出て、外洋の溶存有機物はプランクトンによる生成速度と分解速度が均衡してほぼ一定の濃度が維持されている、ということとを1970年にNature誌に発表しました。

村上 すごくですね。最初にUV法を使ったのは、簡便な測定方法ということでした。そこから、地球規模での循環やマスバランスへと展開されたわけですが、全体を把握するという観点と、簡便に分析するという観点の両軸があるようにお聞きしました。簡便な測定方法をまずやろうと考えたのは

なぜでしょうか。

小倉 COD、BODというのは非常に煩雑で、すぐに簡単に答えが出ないからです。

村上 全体像を把握する難しさがある、と。

小倉 そうですね。だから簡便に測定できる方法を、と考えたわけです。今ではUV計を用いて汚濁がモニタリングされていますけど、それは私どもの基礎が応用されてきたわけですね。学生の当時はそんな全体像を見ているわけではなくて、与えられた課題をやってきた、という感じでした。だんだんやっていくうちに真理の追究といえますか、そういうところに移ってきましたね。このように広い見方というのは、今から考えるとなかったと思います。

村上 そこで伺いするのは、水に関連することの中で守りたいものは何でしょうか、という質問です。「守りたい」というのは、健康、安全、経済性、生態系保全など、水に求めているものという意味でお尋ねしています。

小倉 水にはいろいろな生き物が関わります。水は人間の健康の

ためにもなりますし、一方で、水の中で生態系を構成しています。生物と人間が一緒になって暮らせるような水環境、それが大切なんじゃないかなと思います。やはり一つの生物の立場になって物を考えないといけないでしょう。

村上 ここでいう生物というのは水生生物でしょうか。

小倉 そうですね、主に。そのほかに、河川の周りの植物ですね。川は汚れているから早く流してしまえという発想でコンクリートの三面張りになってしまうと、それでは生き物は生存できない、となります。底が砂利で河原であれば蛇行しながら流れていって、そうすれば生き物も微生物もそこに生存できて、自浄作用も働いて、川は自然にきれいになっていくんじゃないかと、そんなことがだんだん分かるようになってきました。つまり、一つは人間の立場として、健康的に生きるために必要です。もう一つは、周辺の生物の立場になって考える必要があるのかなと思いますね。

村上 東京都立大学理学部の化学科を志望された理由として、多

摩川の汚れという話がありました。が、そのときにも生態系保全の観点から良くないという考えがあったのでしょうか。

小倉 いや、あんまりなかったと思います。やっぱり今でこそいろいろな分野の人たちが、一つの河川について共同でやるようになりましたけれども、当時は水質分析が専門の人は水質分析、水生生物が専門の人は水生生物、という具合に、専門だけをやっていました。

村上 先生の博士課程やその後の研究も、基本的には水質分析が中心だったと思うんですけども、その先に生態系の保全があるという考えだったんですね。

小倉 そうですね。生物の立場になって考えなくてはいけないこととで、生態系学の人たちとの共同研究を進めるようになりました。東大の海洋研は白鳳丸という船を持っていました。それこそ96日間とか、様々な分野の人たちが、みんな船の上で一緒に乗り合いになるわけですね。そこで知り合いになって、同じ一つの試料からいろいろなことをしました。

村上 先ほどのお話で印象的だったのが、水質分析を専門とされながらも、生態系を見て、さらに、川の流量といった視点も見ながらされていたということなんです。

小倉 そうですね。川に行くと、やっぱり生き物がいて、水量というのが非常に大きな問題だと気が付いたんですよ。分析化学だと水をくんで、何ミリグラム・パー・リッターといった単位で見えるわけですが、絶対量がやっぱり大事で、流量を測らないとだめということにだんだん気が付いたんです。そこから河川でも流量を測るようになって、上流から下流に向かってフラックスとしての量が減少していれば自浄作用が働いている、といった具合に評価できるようになったわけです。

村上 その頃ですと、徐々に下水処理も進んでいって、河川の水質は良くなるんだけど流量がだんだん減っていった、という時代ですよ。

小倉 そうなんです。流域下水道ができて、川に下水が流れ込まなくなっただけです。海の方

に一度に下水処理水が流れて、まったく奇妙な川になってしまっただけで、逆に中小河川では水がないという状態になっていました。

村上 なるほど。ちょっと変な状態だなとお考えだったのでしょうか。

小倉 そうですね。昔は水もないという状態もあったので、水量と水質、それから生き物、そういうものを一緒になって考え、河川全体で考えていく必要があるのかなと思いました。

村上 1960年代から70年代初めで、水に関連することで、日本で、ここは良かったとか、ここは誇らしいなということはあります。そういう意味では水質が良くなってきたというところはあるのかもしれないが。

小倉 そうですね。それはもちろんありました。下水道が発展して処理が進みました。同時に、水が汚れていた時代では、環境庁が家庭の雑排水対策を推進していました。汚れを台所で少なくすれば下水を通して川に行く汚れが少なくなる、と。そういうキャンペーンで、市民の意識もできてきたの

じゃないかと思うんですよ。

市民の側でも、下水道ができたから何でも流してもいいということではなくて、できるだけ家の台所できれいにすれば下水処理場の負担も軽くなるし、トータルとして良くなるとの意識が広がりました。

村上 当時、家庭でやる対策というのはどのようなことがあったんですか。

小倉 もう簡単なことで、油を紙でふき取るとか、ろ紙袋にごみを入れるとか、本当に誰でもできることですね。また、当時は合成洗剤の量をできるだけ少なくするといった対策もあって、ずいぶん普及しました。それが後押しになって、下水道処理場の負担を軽くするということにつながっていったんだと思うんです。

市民環境科学の活動と水への価値観

村上 市民環境科学での活動についてお伺いします。市民環境科学活動を始めたきっかけを教えてください。

小倉 1980年代になって、

どうも研究室で閉じこもって研究だけやるのは、ちょっとまずいかなという意識がありました。環境科学を普及させたいという意識があつて、一番のきっかけは、パッケテストです。共立理化学研究所で開発されたんですが、1981年に日本化学会が国立科学博物館で「化学展 未来をひらく化学の世界」を開催したときのブースの一つとして、簡易法による水質分析の展示を担当しました。いろいろな水を持ってきてもらって、そこでパッケテストを使って、水の汚れを測るということをやったんですね。わりに多くの、現地でのいろいろな分析ができるというので来場者、子供たちも来て。

村上 パッケテストで環境の水質を測るという試みは、日本が初めてなんでしょうか。

小倉 いろいろ調べてみると、アメリカでもあるんですよ。メルク社のPHなど。ただ、多項目でやるのは、日本がわりと先進的でしたね。

村上 興味深く感じるのは、先生が最初に卒論から博士課程の間に用いていたUVも簡単に測れる

という意味では共通しているんですけど、目指すところがすこし違いますよね。UVはプロ向けというか、科学として現象を理解するという目的なのに対し、パッケテストは、多くの人たちへの普及が目的ですね。

小倉 そうですね。多くの人たちがパッケテストを使えると直感しました。そしてたまたま1984年に浅川地区の環境を守る婦人の会との出会いがありました。当時、私はずっと多摩川の支川の浅川の調査をしていたのですが、浅川地区の環境を守る婦人の会が、合成洗剤をやめて粉石鹼を使うという運動を始めたというので、いたんです。浅川をきれいにする目的だったら合成洗剤だけではないんですよということ、電話をしていろいろ話をしたら、大勢の人たちが研究室に来たんですね。

それで、勉強会をしようということ、じゃあ、こういうパッケテストがあるから、自分たちでやってみてはどうですかという提案をしたら、じゃあ、やりましょうということ、浅川の支川で月に1回ずつ測定をやり始めたんで

す。定期的にレビューをして、まとめるということをお手伝いしました。パッケテストを使った、河川の面的な広がりを持った調査というのは、いろいろなところで始まったんですね。

それがきっかけで、多摩川、全国の河川、最終的には、2004年に、身近な水環境の全国一斉調査へと発展しました。国土交通省の支援、環境省も後援してくれて、もう20年経過しましたけれども、現在も続いています。延べ20年間で参加者が13万人以上、調査地点は11万地点以上に達しています。簡易法でも間違ったデータが一人歩きしては困るということで、十分に精度管理をやっています。

村上 具体的にはどういうことをされるんですか。

小倉 一つの試料について3回測定し、上下を切り捨てて、中間値を取ります。それでかなり精度が上がるということを検討しました。一人歩きしても大丈夫だという裏付けを取った上で普及させた結果、国土交通省も熱心になって、ずっと支援をしてくれています。環境省も後援をしてくれているという

形で、パンフレットや動画を用いた紹介という風に続いています。

村上 測定項目が少しずつ変わっていったことですが、具体的にはどのような項目でしょうか。

小倉 全国の市民グループにアンケートして、どういう項目を測定しているかとアンケートを取った結果、CODが圧倒的に多くかったんです。有機物の汚れの指標というんだったら、CODがいだらうと。バックテストでアンモニアや硝酸も簡単に測れるんですけど、窒素よりは有機物の汚れの方が大事だねということ、CODにしたんですね。主な項目としてCODをやって、それ以外についてはオブションとして行うように推薦しました。

村上 バックテストではないですが、途中から透視度も測定されていますね。

小倉 そうですね、透視度とか、電気伝導度とか。それをやると、より環境の理解の助けになりますよということ。

村上 透視度いいですよ。お酒の蛇の目のお猪口に似ているか

らというわけではありませんが、私、好きなんですよ。

小倉 透視度、面白いですね。1回の透視度計に水を入れて、上からのぞくというのは結構人気があるんですよ。子供たちにも。見えた、見えないというのをみんなやって、それもグループで調査する面白さの一つなんじゃないか。最初は30分だったんですが、それですと見えてしまうんですね。30分以上のどこまでかということ、を量的数値で表したかったので、1回のものを作りました。今は2回ぐらいのがあります。

村上 最初は婦人の会だったということですが、男性はいなかったんですか。

小倉 いろいろな周辺のおじさんたちはいましたけれども、活発にやったのは婦人の会ですね。それは合成洗剤をやめて石鹸を使うという活動は生活者の立場から立ち上がったグループだったからです。男性が関わってもおかしくはないんですけど、少なかったです。

ただ、だんだん全国に普及するに従って、自然を守る会といった

会が主体になって、水質調査をやるようになったんですけども、そうするとやっぱり男性の方が多いですよ。

村上 年齢層についてはいかがですか。

小倉 課題の一つは、最初は若かった方も、20年もたつと、その分、年をとるということですね。高校生のクラブやその卒業生が地元でやるなど、少しずつは引き継いでいけるようになりました。国土交通省がキットを無償で提供するというのが大きいんですね。

村上 国土交通省、あるいは後援している環境省の立場からみて、身近な水環境の全国一斉調査の結果は、行政上どのように活用されているのでしょうか。

小倉 国土交通省での測定とともに、市民の活動の結果もホームページに出ています。市民と一緒にやっていきますという、PRの一つになっているんだと思います。

村上 市民とともに行う環境保全活動は、市民に開かれた学会へと展開されたそうですが、どのようなきっかけがあったのですか。

小倉 きっかけは2002年の日本陸水学会の大会を東京農工大で開催したときです。「水環境を担う」という公開シンポジウムがあつて、専門家と市民が対等な立場で、課題について話し合っ提言をしていく、というワークショップを開いたんです。その後、いろいろな学会でも、大会の一部として公開シンポジウムや公開講演会が開催されるようになりましたが、その一つのきっかけになったのではないかなと思います。

村上 最初はまさに市民と専門家が話し合うという意味の公開シンポジウムだったんですね。

小倉 そうですね。ワークショップは珍しかったんだと思います。行政も市民も専門家も含めて水量、水質、いろいろな関心のある方に入ってもらって、いくつかのグループに分けて成果を発表して、またまとめると。今後ともこういうことが必要だ、ということとで終わったんですけど、そんなことをやったんですね。

村上 今はどのようなことをさ

小倉 今は、市民に開かれた行

政機関（日野市）による環境講座を開催しています。今、16期目に入っていて、15期まで264名が修了しました。退職した方や主婦の方など、地域の人たちが受講者ですから、地域のことをよく知っています。授業では、あまり一方的な話はせずに、話題提供をするようにしています。そうすると、みんな関心があるから、自分はこの思うとか、どんな話題が展開していった面白いです。だから続いているんじゃないかと思えます。

村上 その方々は地域の環境リーダーとして活動されているのでしょうか。

小倉 ええ。修了された方々は湧水の調査などもしています。ここでは、黒川の湧水ですね。最初から水量も水質も測定しています。一度、マンションができたときに、ベントナイトで地盤強化した際に漏れてしまって、湧水が白濁したことを見つけて、漏れないようにしてもらったこともあります。

村上 それでは、市民環境科学を進めていった際の先生のお考えを教えてください。特に重視して

いること、大切にしていることと、いうのは何なんでしょうか。

小倉 私は、話題提供はします。その課題に関して、参加するみんなの意見を引きだして、発言してもらおうということを大切にしています。地域の人たちはいろいろなことをものすごくよく知っているんですね、ここが問題だとか、最初の浅川の婦人の会でもそうです。

小倉 そうですね。たとえば、木炭による水質浄化というアイデアが出たこともあります。側溝がすごく汚れているので、そこで何か浄化をしたいということで、たまたま林業試験場を退職していた方がいて、その方に炭を提供してもらって、水路に入れて浄化できるか試してみたりしました。実際はそんなに効果はなかったんですけど、そういう実践活動をやってみると、市民の方自身が、じゃあ、家庭の中であるべく、汚れを出さなければいいということに気が付くわけです。自分たちで考えて結論を出してもらうというのが大事だと思うんですね。あと、

継続というのが非常に大切です。全国一斉調査は百年の計です。継続していきましょう。

村上 以前、先生の授業をお聞きした時に百年の計を持つと同時に、市民活動で10年に一回ぐらい、ときどきリセットするような視点も必要だともおっしゃっていたように記憶しています。

小倉 そうですね。やっぱりみんな飽きちゃうんですね、だんだん。継続は力でも大切なんですけれども、10年ぐらいやって、きちんとまとめて、じゃあ、一方ではルーティン的なものは継続し、その中で課題が見つからなかったら、ある程度、ほかの地点に移るとか、そういう見直しも必要なのではないかなと思います。

村上 それでは、水に関連することです。水に関することです。守りたいと思うものについて教えてください。先ほど、水質、生物、自然に近い水量、川の流れとおっしゃっていましたが、市民環境科学を進めていった中で、特に守りたいと思うことは何でしょうか。

小倉 やっぱり景観でしょうね。大きな河川では、治水開発のため

に、河川敷や川の流れの様子と、いった景観が変わってしまっています。なるべく平坦にして水が流れるようになっちゃうんですね。そうすると、生態系も含めて、今までの様子とずいぶん変わってしまっています。本来は瀬と淵があつて、蛇行しながら流れるのが川だと思うんですけども、平坦にして川の水を流すようなやり方をすると、なかなか生物も生存できないような環境になってしまっています。そういう景観でまた新しい生態系ができるのは10年、20年ぐらいかかって、ちやうと思ふんですね。だから、できるだけ景観は維持しながら、そのうえで、新しい景観にするにはどうしたらいいか、ということになります。今は市民が本当に関わっていますね。多摩川水系河川整備計画など、行政がずいぶん市民と対話をしながら、河川環境の管理をするようになりました。それは市民活動の大きな成果だと思います。

村上 行政側が市民との対話をするようになったきっかけは何でしょうか。

小倉 最初は反対運動だったん

ですよね。例えば、ダムや堰を造るな、という反対運動。一方で、造る方も考えがあるわけで、お互いに立場を理解すれば、話し合いができるんですね。多摩川流域では、当たり前のように、行政と市民が一緒になって話をするようになった。それは非常に大きいことだと思います。20年前ではなかなか考えられなかったことです。

村上 市民の皆さんも実際に測定調査をずっと長くやっているわけですから、ちょっと試しに言ってみるということではなくて、長く行われた活動に裏打ちされた発言ですね。

小倉 そうですね。それは重いですよ、やっぱりそういう方の発言というのは。

村上 1980年代から2000年代ぐらいまでのこの変化の中で、日本の水で良いと思うこと、誇りに思うことは何でしょうか。

小倉 やっぱり浄化、水質をきれいにするために市民が関わってきたということだと思いますね。行政と市民の対話が進むようになったというのは誇るべきことではないかと思います。

村上 振り返って、先生の中で、水について、守りたいと思うことや誇りに思うこと、良いと思うことに変化はありましたか。

小倉 水質、水量、生態系、景観へと変化してきていますね。水質は下水道の普及ということで目に見えた改善があったんですけれども、水量は一番やっかいです。水量を増やすというのは市民の力では容易にはできない。それこそ上流に木を植えたり、浸透する地下水を増やして、河川の周辺から流入する湧水を増やしたりと、かなり大変なことではないかなと思うんですね。一番の課題は水量をどう確保するかということで、流域全体で考えなくてはいけない問題だと思います。また、景観については、ずいぶん話し合いの場ができるようになってきました。上流、中流、下流でそれぞれ特徴がある景観を残して、変えるべきところは変えていくということも話し合いの材料になってきています。もう一つ、大学のほうが社会貢献を評価するようになったのも良い変化だと思います。

村上 私の用意した次の質問が、

これまでしてきた活動に対して価値観がどう反映されたか、また逆に活動によって価値観がどう変化したか、というものです。先生の場合は、水質、水量、生態系、景観を守りたいものの軸にしながら変化していきました。一方で、活動も、研究者としての専門分野の研究から、さまざまな分野の方との共同研究、市民の方々と一緒に活動という風にな変わってきました。この活動と水への価値観はどのようにに相互に関係があったんでしょうかという質問です。

小倉 一つには、自分では生態系は重要だというのは分かっているけど、専門的な研究というのはできないですよ。異分野の研究者と一緒にやって、だんだん総合的に河川を理解できるようになってきたんじゃないかな。そういうふうにな変わってきた。一つのことだけを見るのではなくて、できるだけ全体を見る。そういう課題を掲げて、実際は細かいことをやるというふうにな変わってきているのではないかなと思いますね。

村上 市民の方々の活動についてはいかがでしょう。

小倉 学問は大学や研究機関だけでやるものではなくて、市民もやるのだという意識をぜひ持ってもらいたいという考えがあったんですね。だから、できるだけ分かりやすく講義をする。簡易法を用いて自分たちで測定してみる。そういうことをやれば、自分たちもやれるという自信ができるのではないかなと思うんですね。

村上 市民の方々の活動として、先生がこれも大事だなと思うようになったという変化はありましたか。

小倉 市民から出てきた発想を具体的にいろいろお手伝いするのが我々の役割ではないかなと思います。発想はいろいろな市民が持っておられると思うんですね。それを引きだすことを重視するようになりました。

中村 先生は、50歳くらいまでは、自然科学というか、ある意味、地球規模の水課題に対して研究をされていました。50代以降、水の市民科学であったり、よりローカルな水課題に対して入っていったりしようと思ったのは、タイムリグ的にこの時期だったのは偶然な

んでしょうか。それとも、何かしら
のきっかけで関心が変わったの
でしょうか。

小倉 関心が変わりましたね。
市民と接触するようになって、市
民の考えから学ぶようになってき
たんです。もともとは自然科学を
やりたかったんですけども、そ
の後、水の課題に対してどうする
のということを分かりやすく伝え
ていかなければだめなのではない
かなと考えが変わってきたように
思います。浅川地区の環境を守る
婦人の会の方たちと接触がなかっ
たら、広く市民へという考えはで
きなかったかなと思っています。

村上 これが最後の質問になる
んですが、もしも先生が今40代前
後で、水分野で活動するとしたら
何をされますか。

小倉 ヨーロッパに行ってみて、
文化を見てみたいです。今、文化
というのに興味を持っています。
だんだん、背景とか、そういうこ
とに興味を持ってきたんですね。
山崎正和さんが書かれた「水の東
西」によれば、日本は見えない水、
いわゆる鹿おどしなのに対し、
ヨーロッパは噴水である、と。そ

ういう違いがあるのではないかな
と思って、なるほどと思って。そ
ういう文化の違いを調べるのは面
白いなと思いますね。

まとめ

小倉氏のインタビューから抽出
された水への価値観（水について
守りたいと思うことや誇りに思え
るようなこと）は次のとおりであ
る。

- 人間の健康を守ると同時に、生
物と人間が一緒になって暮らせ
るような水環境を保つこと
- 水質、水量、生態系、景観の観
点から総合的に水環境を見るこ
と
- 市民と専門家が共に働き、行政
と対話をすることで水環境を
作っていくこと

付記

本インタビュー企画は、大阪大
学感染症総合教育研究拠点の研究
倫理審査委員会の承認を得て、村
上道夫（大阪大学）、中村晋一郎
（名古屋大学）、乃田啓吾（東京大
学）によって行われた（承認番2
023 CREER-1212）。ク

リタ水・環境科学振興財団（水や
水環境分野における研究者のネッ
トワークの構築を支援するための
助成）を受けて実施された。ここ
に謝意を示す。

【訂正】水道公論5月号掲載の
『水』が持つ価値とは何か―第7
回 有識者インタビュー―渡邊紹裕
氏』のP42記載の「1998年
に水文・水資源学会が立ち上がつ
た」ですが、正しくは「1988
年に水文・水資源学会が立ち上
がった」です。お詫び申し上げます。

日本水道新聞社 電子版

無料メール会員募集!!



QRコードから
ご登録ください